

訪問型子育て支援を利用するまでの経緯と利用前後の気持ちの変化

山形県母性衛生学会

渡邊礼子（山形県立保健医療大学）、渡辺比呂子（カモミール）

1. 研究背景・目的

妊産褥婦等の不安や負担軽減のため、妊娠期から子育て期にわたる切れ目のない支援を行う事業として、2014年度から妊娠・出産包括モデル事業として産後ケアが始まった。産後ケア事業には、宿泊型とデイサービス型、アウトリーチ型（以下、訪問型）がある。宿泊型とデイサービス型は実施している医療機関や助産所にて母子のケアや授乳方法の指導、育児相談を受けることができる。訪問型には助産師が訪問して提供する乳房ケアや研修を受けたボランティアが訪問する家事及び育児の援助などがある。産後ケア事業以外にも家事代行や育児サポートを提供している施設もあるため、ここでは家庭で受ける子育て支援全般を「訪問型子育て支援」とする。

新型コロナウイルス（COVID 19）の感染拡大に伴い、子育て家族は孤立化・密室化している。コロナ禍での家庭内でのトラブルの増大、DV や虐待につながる可能性が極めて大きいこと¹⁾や、2015年から2022年にかけて母親の子育てへの肯定的な感情が減少し、否定的な感情が大幅に増加していることが明らかにされた²⁾。現在の生活に対する満足度は低下し、子どもの面倒を見てくれる人や機関・サービスは減少傾向にある。また、「子育ても大事だが、自分の生き方も大切にしたい」と考える母親が増加している。これらは母親や子育て世代の価値観の変化だけではなく、社会情勢も大きく影響している。2015年の山形県における産後ケア事業のニーズ実態調査³⁾では、育児協力者には夫や実父母が多くその支援に不足は感じていなかったが、コロナ禍での子育てについては検討の余地があると考えられる。

産褥入院中、退院後にスタッフの支援がなくなることを不安に思う褥婦は少なくない。退院後の新生児や乳児を連れての移動は、あらゆる事態を想定した準備をしなければならず、産後の母親にはハードルが高い。子育て支援を利用しなかった、利用できなかった背景には、子育てでうまくいかないのは自分が対処できていないだけだと感じ、乳児と外出する大変さや外出させる抵抗感等があり、利用を抑制していることが明らかにされている⁴⁾。退院後に家庭へ訪問してもらい、実際の生活している場所で必要な支援を受けることができれば、外出の準備の必要がなく、リラックスした状態で支援を受けることができ、より自分達らしい子育てをすることが可能になると考える。

本研究は、訪問型子育て支援を利用するまでの経緯と子育てに家族以外のサポートを利用することを抑制している理由、また利用の前後での気持ちの変化を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

山形県内の訪問型子育て支援を提供している複数の施設へ研究協力を依頼し、訪問型子育て支援を利用している母親にチラシを配布してもらい、関心や協力の意思がある場合にはチラシのQRコードから研究者にメールで氏名や連絡先などを送信してもらった。研究協力依頼文書、同意書等を郵送し、協力者の都合の良い日時で電話もしくはZoom cloud meetings(以下Zoom)で研究の概要について説明し、研究協力を同意する場合は同意書を返送してもらった。同意が得られた協力者と面接日時を決定し、「訪問型子育て支援を利用するまでの経緯」、「子育てに家族以外のサポートを利用することを抑制している理由」、「利用の前後での気持ちの変化」について電話もしくはZoomで半構成的面接を行った。山形県立保健医療大学倫理委員会の承認を得て実施した。(承認番号2302-30 令和5年2月16日)

3. 結果

4施設に依頼し、すべての施設から協力が得られた。4名の母親から連絡があり、日程調整ができなかった1名を除く3名から研究の同意が得られた。調査は令和5年3月に実施した。

1) 対象者の概要

助産師が訪問して提供する乳房ケアを受けた者が1名、研修を受けたボランティアが訪問する家事及び育児の援助を受けた者が1名、看護師免許を持ったドゥーラ[※]であるナーシングドゥーラ（以下、ND）からの援助を受けた者が1名であった。3名とも母児共に身体的・精神的な問題はなかった。対象者が3名と少ないため、1事例ごとにまとめていく。対象者の語りは斜体で示す。（※ドゥーラとは妊娠期から産後早期まで、出産に関する身体的、心理的、社会的なサポートを提供する専門家のこと）

2) A氏

A氏は一人目の子育て中であった。里帰りはせずに産後は夫が育休を取得し、夫婦で子育てに取り組んでいた。夫の育休が終わったタイミングの産後3ヵ月の時に、研修を受けたボランティアが訪問するホームスタートを週に1回の訪問を4回利用していた。

① 訪問型子育て支援を利用するまでの経緯

産後1ヵ月未満での赤ちゃん訪問で保健師から情報を提供されており、子育て支援センターでママ友と一緒に事業について話を聞いていた。利用しようと思った理由として「冬で、あんまり外に出れない。出にくい。赤ちゃんを連れて出にくいから、来てくれるのがいいなと思って。で、実家も遠いし、地元も遠いしで友達もいなくて、しゃべり相手が欲しいなと思ってお願いしてみました」と語っていた。「ボランティアさんが来てくれるみたいな情報だけだと、何ができるのか、何してもらえるのかわかんない」と保健師からの情報提供の時点で関心を示していたものの、具体的なサービスを理解していなかった。しかし、「支援センターに行った時に、ママ友がホームスタートのことを質問していて、私も聞きたいと思って、一緒に聞いてお願いしました」という行動につながっていた。

② 子育てに家族以外のサポートを利用することを抑制している理由

利用するまでには「他にもお願いする人っているもんなのだろうかとか、あとは、お金はかかるのかなーとか、かかるとしたらどれ位なんだろうとか、なんて言うんですかね、別に全然めっちゃめっちゃ困っているわけじゃないのに頼んでいいのかなとか、なんかもっと大変なお母さん達いるだろうからそっちに優先的に行ってもらった方がいいのかなとか」と迷いが語られた。利用後も「やっぱり、他にももっと困っている人いたんじゃないかなっていう気持ちはあるっちゃある」と支援を受けることへの後ろめたさを感じていた。

③ 利用の前後での気持ちの変化

担当していたボランティアスタッフとの関係について、「1週間のうちに、ボランティアさんが来る日って予定表に1個予定があるだけでも気分が違うっていうか、楽しみだなって。楽しみがあって、1週間にメリハリができる」、「連絡先を交換しちゃダメみたいなのがあって、4回終わったらもう、まるっきり関係がなくなるっていうのは淋しいなって思いました」と語り、家族以外の誰かと会う予定があることが楽しみになっており、サポートの終了と共に会えなくなる淋しさを口にしていった。そして、ボランティアスタッフと一緒に出かけた散歩の際に地域住民との関わりがあり、「そういう機会がないだけで、地域の人っていうか、まわりに優しい人っているんだなって思いました」という体験をしていた。

3) B氏

B氏は一人目の子育て中であった。実母の体調不良により実母からのサポートは得られず、産後1ヵ月半は義母からの食事に関する支援を受けていた。分娩入院中は乳頭保護器を使用しないと直接授乳が難しく、退院後に親戚の助産師から直接授乳の支援を受けていた。その後、産後2ヵ月の時に助産師が訪問して提供する乳房ケアを、産後ケアとして市町村からの助成が受けられる2回利用し、その後自費で助産院での乳房ケアを1回利用していた。

① 訪問型子育て支援を利用するまでの経緯

市町村の出産準備教室で産後ケア事業を知っており、「せっかくだったら受けてみたいという思いは元々あって。一番は息子がおっぱい飲むのがへたくそで、乳頭保護器がないと飲めなくて、出はいいんですけど飲むのがへたくそみたいな感じで。成長してくれば自然と飲めるんじゃない？と言われて退院はしたんだけど。ずっと母乳と混合で過ごしてたんだけど、いまいち量もわかんないし飲ませ方も悪いのか、出ないのがわからなくて。おっぱい見てほしいなっていうのが一番強くて利用したのが、一番の動機というかきっかけ」と語り、親戚の助産師からの支援は何回も来てもらうことへの申し訳なさを感じており、「市町村でちゃんと紹介してくれる助産師さんもいるんだったら頼もう」と思い利用していた。「(分娩施設の)先生は(乳頭保護器を)使うなっていう感じだったんですけど、でもそれがなくて怒って吸ってくれなくて。どうやったら母乳育児に持っていけるのかなって、成長を待つのが一番的な感じで退院した」と退院後の授乳に関する支援を求めている。また「分娩した施設では〇〇市の援助のいろいろはもらえるんですけど、病院にも入院できるじゃないですか。△△町はそういうのがないんで。〇〇市に住んでいて、結婚して△△に来たので。びっくりしましたね。住んでいないだけで使えないの？って。でも産むまで産後ケアとか知らなかった。産後ケアってこういうことやっているのね、〇〇市でもやっていて△△はやっていないのね、みたいな。分娩施設の産後ケアだとおうちに来てくれない。助産師さんの方だとおうちにも来てくれるし。どっちでもいいよって言われて、来てもらう方がいいなって思って」と市町村によってサポートの選択肢に差があることに対する思いが語られた。

② 子育てに家族以外のサポートを利用することを抑制している理由

子育てに家族以外のサポートを利用することに対して、母親本人は迷ったり躊躇することはなかった。支援者である義父母からも「やり方を押し付けるとか全然ないんで。頼れるものは頼ったほうがいいべみたいな感じ」と理解が得られていた。利用までの手続きに関しては「使うにも、保健センターの方に紙を持っていかないといけなくて。助産師さんに来てもらう前に、外出してそれを出しに行くってのが…。事前に出していいんだよって言われれば、お仕事がお休みに入ったら出しに行こうかな、とか。妊娠中に利用する意思があれば、そこまで準備できればなと思うんですが、産んでから何とか出して。申請してから待っている間もつらいですよ。本当に早急に利用したい場合はって思っちゃう」と、産後に困ってから手続きを始めるのではなく、妊娠中に手続きをして産後すぐに利用できるようにしておくことなど、今後産後ケアに望むことも語られた。

③ 利用の前後での気持ちの変化

産後ケアで「アドバイスをいただいてから、気持ちもだいぶ落ち着いたというか。赤ちゃんも落ち着いたし、私も落ち着いた」と語っていた。ラッチオンやポジショニングをみてもらい母乳を飲みとれていることがわかり、授乳に対しての不安な気持ちだけでなく赤ちゃんの状態も落ち着いていた。また、「授乳の悩みのメインの内容も進んでいるというか。私がそこで止まってたから、おっぱいについていってなかった。一人目なので、二人目だったら違う目で見れていたのかもしれないけど。わからない中で、整えてもらえたからすごい楽になった」と、退院後の母乳育児の変化に合わせた支援が語られていた。訪問型について「最初の1ヵ月の時は余裕もないの

と、この慣れているおうちの環境でいろいろアドバイスをもらえたのがありがたかった。家にあるものでアドバイスもらえるじゃないですか。この姿勢でこの椅子の方がいいよというのも教えてもらえる。家の環境で教えてもらった方が、そっちの方がよかったのかな」と、実際の生活している場所で支援を受けることにより、より具体的な支援を受けられ、支援後の行動もしやすいことが語られた。

4) C氏

C氏は三人目の子育て中であった。実家は近いが里帰りはしなかった。NDを利用しており、利用時期は妊娠中に1回、分娩退院後からは週に2回、産後3ヵ月からは週に3回の利用回数を増やし、子どもが1歳になっている現在まで継続している。

① 訪問型子育て支援を利用するまでの経緯

二人目の子育ての思い出が語られ、「2番目の出産のときにうまくいかなかったところもあったので、身の回りのこと、掃除とか食事とかを実家の方でもらって助かったんですが、上の子への関わり方というところで悩んで、私の母親とかにもっと支援が欲しかったところもあって、思うように私も伝えられなくて、もどかしい思いをした」、「2番目の時は授乳も完母だったので、もう泣く度にずっと、いつ終わるかわからない授乳で上の子を待たせてしまったり、離れられないのもあったので、上の子の気を紛らわせて、遊んでもらいたかった。私の母親も農家を手伝っているんで、出かけていなかったりとかでお願いできなかったので、モヤモヤして、子どもにつらく当たってしまったりとかあった」という経験から、新聞で特集をされている記事を見てNDへ連絡をし、利用につながっていた。C氏は三人目の妊娠中から家事代行サービスを利用していた。しかし、産後に家事代行サービスの人員不足があり、家事代行サービスとNDの併用からND一本にしていた。その理由として「家事代行サービスは子どもまでは見てくれないっていうのもあって」と語っていた。

② 子育てに家族以外のサポートを利用することを抑制している理由

子育てに家族以外のサポートを利用することについては、二人目の時の後悔があったから迷いはなかった。二人目の子育てを振り返り、「家族以外のサポートという選択肢はなかったですね。何とかかなと思っていました。でもうまくはいかなかった。実家の方でうまくいかないなと思っていたので、早々に帰ってきて、慣れた環境に戻って生活を組み立てなおす。主人にはもちろん協力してもらって、分担してもらって」、「日中は子どもたちの気を紛らわせて遊ぼうとして、試行錯誤で保育園ごっこをしたりだとか、何か作ったりとか。そういうのに重点を置いて、子どもとの遊びに、家のことはできることだけ。2番目の子がぐずぐずしておんぶしながらご飯出ししたりとか、夜中の朝方4時ころからご飯出ししたりとか、寝かせながら、そんな感じだったので大変だったといえば大変だった」という経験が、家族以外のサポートを得ることに対して迷わずに助けてもらおうと思えていた。妊娠中に産後の生活について考えることについては「実際に産後の生活を想像して、どれが必要かなとか、どこにお願いしようとか想像できないと、なかなか難しいのかな。妊娠中は妊娠中の情報収集をするから、おなかにいるから無事に生まれるかなっていう不安もあるし」、「家族にお願いするっていうのは多いから。祖父母が近くに住んでいるので、保育園の送り迎えはじいちゃんにお願いしようとか。優先順位としてまず家族を考える。だから市町村とか外の支援っていうのは、なかなか探しにくいのかな、頭に浮かばないのかなと思いました」とも語っていた。

③ 利用の前後での気持ちの変化

実際には、掃除、洗濯、調理の他に、上の子と遊んでもらうという支援を得ていた。感想として「楽。ありがたかったですね。あれもしなきゃこれもしなきゃって思っているところをしても

らうことで、気持ちが軽くなるし、私ができないところで子どもと遊んでもらうと、その時間私が休めるから、また子どもと遊べる力が出たら別の時間に子どもと遊べるし。沐浴もしてもらったし、新生児の方はちょっとした変化を見てもらえたので、教えてもらおうと安心できた。いつも、こんなんで大丈夫かなと思いつながらお世話しているところを、NDが来てくれた時にみてもらうことで大丈夫なんだって思えた」という語りが聞かれた。また、「明日来てくれるんだと思うと安心するとか。看護職っていうのがあるので、体調とか心配なことに相談に乗ってもらえるという安心感ある。心配だ心配だってならなくて済む。一緒に考えてもらえるので、相談する人が一人増えるだけで、子育てを大変だってならず、子育てを楽しむ余裕もできるのかなと思っています」という看護師免許があるからこそその安心感も語られた。C氏は継続して支援を受けているため、「健診で聞いてもマニュアル通りの答えで、ちょっと納得いかない時もある。家に来てもらって、まわりの家族のこととか家を見てもらって相談に乗ってもらおうと、わかった上で返事をくれるっていうのありがたい」と、より自分に合った解決方法の提案を得ることができていた。また「家事はもちろんなんですけど、家にいるので話し相手になってもらってるところもある」と、変化する子育ての中で求める支援も変化していた。インタビューの最後には「みんなに『大変なのは今だけだ』って言われるんですけど、大変だけで終わりたいとは思わないと思う。楽しいっていうのが一番。大変なのは大変なんですけどね。楽しさもそれだけあるから。それを助けてもらうことでそれを実感できると思う。笑えないっていう時もあります。子どもがふざけ合っても、いっぱいいっぱいだと笑えないけど、余裕があると同じ事で一緒に笑える」と、サポートを受けることで余裕を持ちながら子育てができることについて語られた。

4. 考察

1) 訪問型子育て支援を利用するまでの経緯

2名は市町村が行っている訪問や出産準備教室がきっかけで訪問型子育て支援について知ることができていた。しかし、3名とも妊娠期の市町村からの説明だけでは事業内容を理解するには至っていなかった。

C氏が語っていたように、妊娠中に産後の生活を考える機会は少ない。妊娠期の出産準備教室では妊娠中のことや育児技術だけでなく、アフターバースプランと言われる妊娠中から産後の生活を具体的に想像し、子育ての方針や自分達が持っているサポート資源を考えたり、これから得たいサポートについて考えるような支援内容も必要だと考える。また、経産婦の場合、子育ての経験があるから何とかできるだろうと思いついても、生まれたばかりの新生児と入院期間中に離れていて甘えたい上の子の世話を同時にしなければならぬ。加えて、支援の対象が初産婦限定になったり、経産婦は支援の対象にならないこともあるが、経産婦だからこそ必要な支援も検討していく。

訪問型子育て支援を選択した理由として、3名とも子どもを連れての移動の困難さを挙げていた。これは先行研究⁴⁾で明らかにされた母親が感じている乳飲み子と共に外出する大変さと児を外出させる抵抗感に当たる。「支援センターに行くひとつにしても、着替え持ってとか、念のためにこれ持ってとか、荷物だけでも増えるし、二人子どもを乗せるのもいっぱいいっぱい、チャイルドシートいやだとか、出かけるのにも30分かかったりする」(C氏)、「産後1ヵ月2ヵ月で行くっていうのは大変ですね。」(B氏)などの語りがあった。おっぱい外来など退院後も継続して母乳育児のフォローしている分娩施設とそうでない施設もある。対象の家族や居住地等の背景を考慮し、分娩施設でのフォローが困難な場合は訪問型の産後ケアにつなげたり、施設を越え支援者同士が協働していくことも必要である。すべての支援者が、誰がどこでどんなケアを提供しているのかを知ることで、子育て家庭を分娩施設から地域につないでいくことが可能になるのだと

考える。

また、調査時期は冬であったため「冬の間だと雪つもるんで、車の雪かきとか、あと出かける前に、エンジンかけに行っておいて雪かいて、その間1人で待たせなきゃいけないし、あと着るものが多いのもめんどくさいし、荷物も多いし、道も除雪はなっているけど怖いし。冬出かけるのも結構億劫でしたね…」(A氏)、「出ていくのが大変で。冬だったのもあるし。冬道でなれなくて、チャイルドシートも大変な感じで、なかなか外に出るっていうのが難しかったから、来てもらえてありがたかった」(B氏)など、豪雪地帯ならではの子育ての大変さが語られた。そして、雪道の運転が大変なのは子育て中の母親だけではなく、母親をサポートする家族にとっても同じである。

「雪ない時だと母と中間地点でランチとか、友達ともできたんですけど、雪降ってからお互いに運転したくないっていうので、予定が全然ないみたいな感じだったんで、冬の間にはホームスタートできてもらえるのは大きかったです」(A氏)とあるように、雪の季節には気分転換の機会が減ったり、家族からの支援が得られにくくなる家庭も存在している。季節に合わせた子育て支援というものも考えてく必要がある。

2) 子育てに家族以外のサポートを利用することを抑制している理由

子育てに家族以外のサポートを利用することを抑制するものとして、心理的な理由を挙げているのはA氏のみであった。B氏は助産師の存在が身近にあること、C氏は二人目の子育ての経験からサポートを得ることを躊躇せず、利用につながっていたと考える。

A氏は自分よりも大変な人がいるかもしれないのに自分が利用してよいのかと後ろめたさを感じていた。母親たちは自身が抱えている不安や心配事は相談するほどのことか自問自答し、相談へ行くことを躊躇している⁴⁾。C氏はこれまでの育児を振り返り、「家族以外のサポートという選択肢はなかったですね。何とかなると思っていました。でもうまくはいかなかった」とあるように、母親や家族自身に家族以外のサポートは選択肢にも挙がらない家庭もある。“家族の問題は家族で解決”という考えが根付いているのは風土も関係していると考えられる。先行研究でも支援を受けることに対して夫を含め家族からの理解を得る難しさを感じていた⁴⁾。母親だけでなく家族に対しても、子育て支援にはたくさんの選択肢があること、自分達らしい子育てをするためにはどれを選んでよいことを妊娠期から伝えていくことも必要である。山形県の県民性として辛抱強さが挙げられる。自分より大変な人がいるのにサポートを受けるなんて、まわりはサポートを受けずに子育てをしているのに頑張れない私はダメな母親と考えるしまう母親もいる。そもそも、子育てにおいて楽をすることが悪いことなのだろうか。「大変なのは大変なんですけどね。楽しさもそれだけあるから。それを助けてもらうことでそれを実感できるなと思う」(C氏)とあるように、子育てが楽しい、産んで育てたいと思えるように社会全体の意識を変えていく必要がある。産後ケアの対象は体調や育児に不安がある者とされることが多い。“育児が大変になる前にサポートを受けることが当たり前”になるように、支援者自身が意識していかなければならない。

また、「何ができるのか、何してもらえるのかわかんない」(A氏)「産むまで産後ケアとか知らなかった」(B氏)「市町村からの情報、産後使えるもの…思い当たらない」(C氏)とあるように産後の支援の情報が母親自身に届いていないこと、活用するまでに手続きが必要なことも考えられた。子育て支援に関する情報提供は妊娠期間でされることが多いが、前述した通り妊娠中に産後の生活については考えづらい。新生児との生活が始まってから申請の手続きは困難であるため、産後に使える支援を妊娠中にすぐ使えるように準備しておくことも必要である。産後の生活が想像しにくいのであれば、子育てが始まった入院中または退院後の早い時期にある出生証明書や乳児医療証の手続きと共に、子育て支援の申請することもできるのではないだろうか。

金銭的な理由や市町村によって受けられる産後ケアの選択肢に差があることも挙げられた。費

用のかかる産後ケアの利用は夫に遠慮してしまう母親もいる⁴⁾。「家事代行サービスも市町村によっては助成が出るらしいんですけど、住んでいる所は出なくて。金額的にも安いものではない」(C氏)や、結婚前までの居住地だと受けられた産後ケアが現在の居住地だと受けられないことに驚いたという発言もあった。産後ケア事業の内容の差には、分娩施設が地域に存在するのかにもよると考えられる。財源については検討が難しいが、市町村と県がともに事業を展開することで、選択肢の格差は解消するのではないだろうか。

3) 利用の前後での気持ちの変化

訪問型子育て支援を受けることにより3名ともリフレッシュや安心につながっていた。

ホームスタートを利用したA氏は「実家も遠いし、地元も遠いしで友達もいなくて、しゃべり相手が欲しいなと思ってお願いしてみました」と利用の動機を語っていた。C氏も「家事はもちろんなんですけど、家にいるので話し相手になってもらってるところもある」と語り、自宅に支援者が来て話し相手になっていること自体が孤立した育児からの脱却につながっている。

また「ボランティアさんが来る日って予定表に1個予定があるだけでも気分が違うっていうか、楽しみだなって」と語り、家族以外との交流の予定があるというだけで、生活にメリハリができていた。また、A氏とB氏は母親と支援者の関係構築が外出へのハードルを下げている。时期的な子どもの発達に影響していることも十分に考えられるが、「晴れているタイミングをみて犬と、赤ちゃんをベビーカーに乗せて一緒に散歩に行ったり」(A氏)、「外出の機会にもいいかなって思って助産院に行ってもいいですかって連絡した」(B氏)とあるように、A氏はボランティアが同行することで、B氏は外出先が自分と子どもをよく知っている助産師であることが、子育ての場を家の中から外へと広げていると考える。初めての外出に家族以外のサポートがいることで、地域とのつながりを持ちやすくなり、山形県でも“WEラブ赤ちゃんプロジェクト”のような地域全体が赤ちゃんと子育て家庭を応援する活動につながるのだろう。

また、B氏は「アドバイスをいただいてから、気持ちもだいぶ落ち着いたというか。赤ちゃんも落ち着いたし、私も落ち着いた」、C氏は「楽。やっぱりありがたかったですね。あれもしなきゃこれもしなきゃって思っているところをNDにしてもらうことで、気持ちが軽くなるし、私ができないところで子どもと遊うと、その時間私が休めるから、また別の時間に、子どもと遊べる力が出たら子どもと遊べるし」と語りっており、リフレッシュすることがその後の育児に良い影響を与えていた。そして、専門職からの支援であることも、乳房の変化に合わせた支援が提供されていたり、「看護職っていうのがあるので、体調とか心配なことに相談に乗ってもらえるという安心感ある、心配だ心配だってならなくて済む」(C氏)、「いつも、こんなんで大丈夫かなと思いがらお世話しているところを、NDが来てくれた時にみてもらうことで大丈夫なんだって思えた」(C氏)のように、専門職が継続し支援することが安心して子育てができる環境には重要だと考える。

自宅で支援が得られる訪問型であることにより「この慣れているおうちの環境でいろいろアドバイスをもらえたのがありがたかった。家にあるものでアドバイスもらえるじゃないですか。この姿勢でこの椅子の方がいいよというのも教えてもらえる」(B氏)、「家に来てもらって、まわりの家族のこととか家を見てもらって相談に乗ってもらうと、わかった上で返事をくれるっていうのがありがたい」(C氏)という、生活している場所で支援を受けることにより、具体的な支援を受けられ、母親だけでなく家族全体が支援されていた。乳幼児健診の場面で、母親は医療者ともっと話したいと感じている⁵⁾が、他の相談者がいる中で自分の悩みを相談してよいのか迷うこともある。3～4カ月の母親が希望する支援として相談できる場所の充実が挙げられていた⁵⁾。訪問型だからこそ、小さなことでも相談でき、思い浮かんだタイミングで相談することができる。訪問の間は自分だけの支援者であることは、相談のしやすさにもつながっていると考えられる。

5. 結論

- 1) 出産準備教室や赤ちゃん訪問で訪問型子育て支援について知り、産後に支援が必要になってから申請し、利用に至っていた。
- 2) 訪問型子育て支援を選択した理由は子どもを連れての移動の困難さが共通していた。
- 3) 自分よりも大変な人がいるかもしれないのに自分が利用してよいのかと後ろめたさを感じ、訪問型子育て支援の利用を抑制している者がいた。
- 4) 訪問型子育て支援を利用することによってリフレッシュすることができ、その後の育児に良い影響を与えていた。
- 5) 生活している場所で支援を受けることにより、具体的な支援を受けられ、母親だけでなく家族全体が支援されていた。
- 6) 母親と支援者の関係構築が外出へのハードルを下げ、子育ての場を家の中から外へと広げていた。

これらのことにより、以下の支援が考えられた。

- ・妊娠期の出産準備教室では妊娠中のことや育児技術だけでなく、産後の生活を具体的に想像し、子育ての方針や自分達が持っているサポート資源やこれから得たいサポートについて考えるような支援内容も必要である。
- ・対象の背景を考慮し、施設を越え支援者同士が協働していくことも必要である。
- ・妊娠期から子育て支援にはたくさんの選択肢があること、自分達らしい子育てをするためにはどれを選んでもよいことを、母親だけでなく家族に対しても伝えていく。
- ・妊娠中または子育てが始まった早い時期に、産後の支援をすぐ使えるように準備しておく。

6. 謝辞

本調査にご協力いただきました施設および対象者のみなさまに心より感謝申し上げます。

(本研究は、山形県より山形県母性衛生学会への委託を受けて実施した。本研究に関連する利益相反事項はない。)

引用文献

- 1) 才村純ら：新型コロナ禍における子育て家庭の育児ストレスや子ども虐待の実態及びその対策に関する予備的研究，東京通信大学紀要，vol. 4，2022.
- 2) ベネッセ教育総合研究所：幼児の生活アンケート第6回，2022.
- 3) 山形県みらい企画創造部：令和2年度国勢調査 人口等基本集計報告書，2022.
- 4) 金谷掌子：子育て支援の利用を抑制する実情と子育て支援へのニーズ，岩手県立大学看護学部紀要 24，2022.
- 5) 中垣明美ら：母親役割獲得支援に向けた産後3～4ヵ月の母親の現在と妊娠中の思い及び希望する支援の検討，母性衛生，第53巻1号，2012